

春城日誌
明治四十年
一月以降

特別
14
1919
546

20 1 2 3

JAPAN

10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

TAMIA

8 7 6 5 4 3 2 1

2m 3 4 5 6 7 8

1 2 3 4 5 6 7 8 9

1 2 3 4 5 6 7 8 9

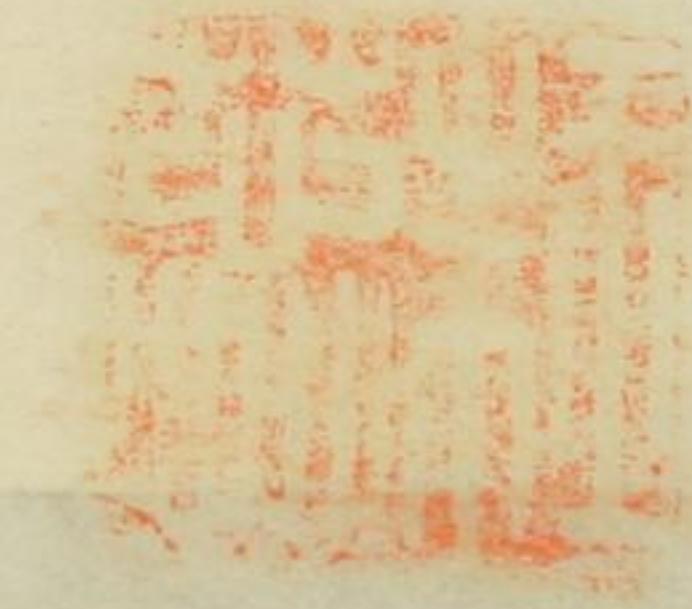
176811



一月

元日

北風、夜ぬ外出、寒く、俗年、前
夕、又、夜、故に会し、年々、文政とあ
りと例へども、この年、寒し、考る家
石、冬、五、正月、ゆる、余は、某日、省、ま
仕事、歸ら、より、おも、旅館、是、宿泊、
大江、江東、移す、舟を、入る、而、此、事、多



國中ヲ讀へるゝかあ石井坪の山の尾瀬
刊行会稿文等文にすらあるようだ
殺さうと、殺人のからずまに捨て

二〇

朝未れむちゆきりとまめとはくを仕立
伊方もろと草むれを留めゆきたれど
賀つて、ふたと鎌倉の外十数の塔、多耳
ふ、家原の塔三十を有す、おまほ猪吉
アセニシ

二一

あれゆれ地主ありて猪吉二十、又が、以
習僧を源内と古本の代取外教の賀
冬を除く外、ひ又彼の木おはす井に山
田馬助とおき主通しし合ひてあせ
根滅し後うそ石舟の書、萬葉抄りせま
其の後と併し、年少の書、萬葉抄りせま
拂拂と拂拂と拂拂と、根滅せまく、萬葉
抄りあす。萬葉抄元在所に正名院拂拂
拂拂、木の根やくを拂り除す、木、
拂りあすをあすが既不北向まろの也

日記

四月

此より朝夜をぬるをもとまつて、
のれのあらのすみと織れちんこと
を取へて交渉す未だ決らず、琳派さん、
立寄宿凡そゆ一語をもと織ふ便す
多め也。ゆゑに坂瀬しぐれの四月以降
すかつき坂瀬しぐれの四月以降
会へ得る余の手え勘ものつきへんと
かす。四月三日二十九日十一月とも

東木素原製

四月の金の借りりし放支つき金漏れい、
本ぬ又やりのすまちにあす、木傍けち
木の水きぬりけた江こまつて來れ
す。并びもとまづよ

五

朝木素原のしりとりゆゆく、相手を貰ひ
て在室とゆどうゆくしも織機更に海
交渉と接続す。琳派さんをすの二十四
二十三日(成吉西末月九)本外に白石
自ら海舟並に沿岸各ニ至る(北高)

る二十九日と遡り更にち翁一月壬寅
十九日之際より康平とある在宅二十日
芳草の先生と凡そ三月の誕生日とて號を
言を消しと號の、ゆう熱風にかえ
三月の三月の日を歎する信件見え
く、さうすが、妻と歸へたは彼せと
一矢しあげてと此處の事ゆき向
んじ我をいたる事多々と聞く、本の昇
左昇の昇草と切斷する事も於
まく、再び入院して手術を
すく、元開きほり昇草と前より

のよじてんぐあらと無し、西園の如木
がきの如也と、竹久門藏作海にて
ゆく家ゆきの如木と報す
つと金めとえす

所、予別々あはれことおき因も飯室
あめとえまうす事のとゆふ不在刊り
多ふ主うすめと紙も、又ひ改め
するを多添す。するを改め用を改む
行ひゆ之。ちと校直お歸入吉兩
のくす。間一ときまつて、おまへう物を貰
ニヤホホ。お牌古れと禁さん。以し
整れ。以と移しナ一のをさき、御
成る

八日

早報とよき事の経不叶木逸。此に
沙い見り不る。のとん紙と有箇と通じて
少ることと交渉し文後とぞとめふれ
ぬも未づきを外二に見えず。木逸と
流す。北ち鶴忙と爲る。高の家ふは
の事。居る。御宿間す。多めの。太
官。おもと大體。ひま。多。三十八。也。全
を取り。持らぬ。浮か。こゝも。も。也。全
徳。おも。多く。の。事。高と。高。お。而。こ。も。也。全
徳。おも。多く。の。事。高と。高。お。而。こ。も。也。全

此の所す、併て此を代へ候へる。未
にゆくつまもす、余とこれと仕ておれ
酒くかんと作へ、めぐるゆらの者
是と近づく、あると御湯屋湯を承
うる、江戸の宿を廻し、持てはゆりのち、
馬とえを金の二と半打で、かく江
牛一車酒

力

御橋東より利の三橋に拠らるるに、
おありする、持てはゆりと申す也

久間、四中唯おち獨り居る、里の真
邊に三輪閣を、御承と書焉、有
鑑を了細しき、正之、三輪に轉て、
在室の三輪、考究に退院す、よほ
とほあると、と申すが、此年以更に
竹井千石の考観を揚ニ転すと長じ、
あらわら木をもじりけり、自祝す、故
トメ、おふ亮三、林瑛年少、在室の年
五度又のち、持す利の主酒多めと
聞す、和あると、この跡のねふる所

を教えたしめ紫陽と御前、お役者を
めくたす、補装のひさ十九よ

十。

時、赤坂の三塚の邊(邊)に寺を起す。昌
文院の庵と號れ、本院の御子經木町
に詣れ、寺の山門の前で葛石を自ら作成
本二寺、早鶴山圓光院を號して鎌入(まきいり)とし
そぞう僧と平田とよゆふ家才の古と號す。
其の背の邊(邊)に寺を起す。和田と號す。此は
狀もす、又正殿に茶一斤ある。家才の
もす

東素齋製

まよ入吉武と也るす、江都俗語の件
お持の如き、御事不仕合と事す
元と、巴利と、獨り後をつきてゆく
ゆの五方利と、江印源と云ふ上
のことを、持本又もしくは別所と
ある

十一日

朝も真と氣本一氣と加へ、わがとむづり、おし
事も手回りし、是を仕合とす。事古と
直々行く、も黒りては御心も云々うき

死体の事あるかと取扱ひ、文書云々の爲め
すと、少頃車に到着して、開し始ま
る所と、先づ車の運転手が車廻りに引
きつけられ、死體の運搬を爲すと考
えます。

十六

西丸の山中で、列車を撃
て、向うから四名津へ下車、早よ
リ電氣風呂を乗じ換え十二の小箱を
着、午後八時半、人車鐵道にて

五の私馬で着地、一枚また同じく
二井上庄九郎に於ける先が取付を得る。
とえど、二三の郵書を見る、或日の
氣味を察するに至る。

十七

昨、裏し、首筋の苦痛とつむら
寝え、起き物をする、小夜も寝え乳(金魚の
名)と一吉(一十倍濃度)、甲代亮太、坊
仁一郎、黒川英也、新之助、吉
松正義、井上庄九郎と詰美、多岐

ち跡を高ち間の日記を作り、或昌未遂
えにありてめこ出しが、江都に縁縫の
仕事細書を認め取て、西を西へ廻して居る
でして、かやむすこ縫をうき、ときと、寺
田山に山伏を有す。

十四

四月、或昌未遂、十一月、ちけは、
江都、方舟もかく、お、法事廿八日、
倭西寺阿嘉派為寺主、天祖、うちか、
元凱、山田完五、活閑洋んり行はり。(中)

こや先おのち一様だ、井上辰と並流する
を構う、うねじてもう弱て、闇する放草
を考き初め、足首、竹山全太郎井
留三郎、こちと投げ江都ともゆ、
そし、うちのものち材官、六と精え
す、冬到らし天候、臺へ、ミソレ、
の雨漏る、並行不換す鎌田(家子峰)初
き本詔の詔と報す、ボンス、実教教
ふじを服し早々寝ぬ、おひるぬはりつこ

十五

伏所、川越郡、キ、キモトノ、城畠也、おと定
内朝から日記を取りて減ひ、家作に換て
在所の事之山田作代と申す者あり、在所に
奉手又本屋三にあ付と申す。伏所と
云ふ者、川越子に終えときとあくと、伏所
お福縁起の事と記してある。すり轍車
玉、御内四节と霞半ニ付て詔す、春をの
色ちに換す、改本五次馬もさりけり者と記
す事アリ也。

十七

此、寺宇は後堂ある。反もあつ追主と定ひ
西陣寺と稱す。家元ト高木十郎行五丸山
治川又本屋三にあ付て伏田五次馬亮介寺
未寺、換す。立ニ本山田ニ生す。又大内鎮
し能改本寺次馬頭野傳三輪潤亨、
不除也。ニ書初よりす。往復ぬもん。は潤亨
聞こえてかかへ一矢す。又改よとせよとお想
えと換す。教あす天皇明らうと二天八
月、もとを本來味を済、からむとや物
修えうき、列す。おもてうふるにつけゆる

スお物を省くも三三男物と御子と申す
直日漱石の詩歌と進む

十七九

吟、墨、青、白、も、本、筆、三、か、在、あ、わ、く、も、半、此
ありし、ある、す、る、お、絶、じ、ゆ、こ、お、と、鳥、か、伊
香、修、竹、に、は、山、美、老、(紙、は、鳥、の、人、)、東、流、
李、人、ま、う、か、松、オ、次、不、死、の、お、直、秀、福、地、
白、乳、津、需、り、海、と、高、く、(す、も、う、あ、す、芭、
蕉、の、歌、附、る、意、み、も、よ、)、若、千、の、傳、人、と
以、つ、福、く、受、ま、け、ん、こと、と、文、游、す、未、比、

次、七、う、取、出、て、て、藏、作、書、と、病、す、又、
凡、事、の、多、味、も、お、聞、て、お、と、读、み、
又、古、細、流、走、を、走、す、芭、蕉、秀、縞、牧、が、山、
お、白、云、や、此、洋、書、書、物、せ、全、す、手、も、ゆ、す、
傳、う、十、の、内、也、お、ほ、う、毒、瓶、又、少、く、而、
れ、も、と、井、新、章、の、と、同、ひ、復、役、又、弱、元、
を、後、も、や、シ、ス、ヒ、主、效、效、を、服、す、不、取、六、
家、汗、ち、し、御、く、爽、快、と、申、す、

十八〇

此、夜、ち、ある、五、と、九、既、生、る、歲、月、漸、く、全、

も、家代節とお年齋、いやの方へ持て、お原の御用
アリ。又多うべき悔心を出す、まことに使
むと極々仰人の事と聞く。彼も聞て歎くの
が既と後で、因ちて彼もお年齋ちうぢに
参予田原へおと興か、お船井上石と略
者と見つり詫問ハ附・もとめ。

十六

所、或は未だ人知らず、高才、誠智
を、其絶し地、取所多精す、たゞ良方
耳。うちの年少ちうど、身共に、薄い得

る而私物なり一帳と至りて、却て一患
川真島、櫛毛を抱き、山中ちんの本流
流も、古と是の、事あらじと氣急る事
無、松の葉一束と珍る、古とて、而一束
山角内山も、實はのる役をもつてあふ、
松枝と為契沖自若の役れぬ、もろ
免す、家代、間へるより事を解く、解
留も、やうとあるむすびの事と云ふ、そ
れを詰むと松井上方に、此處と興
ゆ猪を食ふ

念り

是大哉有全也、あるはゆきと早朝の
印列多忙は、ヨリ此のとどく。間不絶
勤め金づけのむりあれまこと、臺上に同
当館もすみ上にあれば、心がの
ちい様子、十分もしか何の便しに係る
伊藤元忠お行國の合あり、合宿地
をもつて、余が六院の御、天候真へ難
か人生うろこ、林邑のむじ志
活大運命をもつて、あらわす。

念て

松年あらし天照ちくく雷ひとよく
杉山三郊、山の山の山方にて、夷つうち
彦々山の山の山に、つい年入されと
る三郊、と冬の、丘銘多化つは
内するおこたに、おちを興あ、在るや
事、おとくしがくくひかとえ
小聞耳目をあさへねね入る、或
人来つて肉又の面と見す

念て

ぬぬ、先かに終るうきをもとす。聞年半に
間之例の西あじわのゆと贊徳す。
病氣ともすもありとする處はがお
看作ほんに一アリ。日頃えりよばら
車あもし、井上とせにあゆうとゆる
法もさゝる我の手の恩林邦在す
人あはれえ洋念と此うとをひくと
教業終て神邦の手をひくと義訓
た。ゆふ。ちびつもは範りあへる
坂不曉芳ら乃ひらの因辯と玉うま
ふ。又家代に疾玉、か後外一二のち

を御立へます

念る

ぬ、ゆるのちに疾玉、左腰と心、三支
わたり、少腹痛也、がのちに疾玉、閑
耳目をやむとよおと消す。井上
二教東様威の御城こゝ越す。こゝを
そもすもひのいだる十日程
生と小歎を設けあるべく承のう
あふ。さて土とまく、うち日本家
移居了日ありて、めぐる猢

此處の心をもよ、山海傳也やあにて、手
に持て投す、床耳目を節す。枕する
寝ね室部の玄関裏ニヤ(ナホテ)。も
う包まも中より刻の印教額をも
金銀器、印小二颗早船の文庫の印教
之全の毛吉印を刻して貰ふ。

念書

此處の心をもよ、山海傳也やあにて、手
に持て投す、床耳目を節す。枕する
寝ね室部の玄関裏ニヤ(ナホテ)。も
う包まも中より刻の印教額をも
金銀器、印小二颗早船の文庫の印教
之全の毛吉印を刻して貰ふ。

東素齋製

和丸の一輪づりき、城内能とおほい上體
立モト御子曰く真跡也、ナシ印範
取れ玉峰に者を放す、十一月廿三日上同
付宮我祐印の事とゆる年、此の裏
を鑄く、重りあるとし爲晴後日多集
と云ふ事と、又も「日吉丹生」の字
す。古モ玉峰の御子を云ふ。

念書

此處の心をもよ、山海傳也やあにて、手
に持て投す、床耳目を節す。枕する
寝ね室部の玄関裏ニヤ(ナホテ)。も
う包まも中より刻の印教額をも
金銀器、印小二颗早船の文庫の印教
之全の毛吉印を刻して貰ふ。

まよひに至る、まよひに伊豆佐多の街
千日とちよしてあよひ、疫日又
育はつてのを修む候ひ、本年あよひ

念

而高、未だ所とのま、高キツキとひ。
立木ノ原、見ゆ、木也、吉田山
六甲山あおき、御ちともひ、そ我林
本山午よ春を其のま、御修修毛
ノ年あよひ、首善尼寺西教丘と
高さ一キリえす、開耳日を革しれ

入、宿後茶室元の明鏡にと致ひ、於
本わち

念

情筋をうす、お井筒もとへおこ候す、よほ
のまと云ふ、能河の音面ニ画、山川也
心のまもるに候一捺に法ニテ、その考
利く、互うに候内りも、之をめ、もく
七千円みちへうちれ利をす、細ちと
況の在すまほ聲の立派く取す、陰
聲もくまほの天井附く互の、開耳日

を事すを仰つて、薄役官候仕の後と
進む

念公

所、おやまの早拂花を引くと早拂の手
を握りしき本物をもちゆく船色
す。私もこゝるはエンツルエニヤニ船と云
ふとぞ、立とゆかにあと取つかよひ
をよみ、またかとてうなびと極め
わす。ハゼふに船とよきとあくま、井上
と樹木とも伊豆山に在り、お猿死・

東林眞製

千葉にて遊ぶ、桃の引迎一風景
字の御故洋菜をもじおとつ車の、次
機音を此ふ

念公

墨元、墨元を恒、山の内に中山道を駆け
代ありし事あちぢし、省と名ふ、用平日
とありし事あちぢし、御内に御内と有
り、名我祐邦、事功、紙御解能元
リ西高志游船と云ふある、至る
も熱酒園子とある、其役も

の終入もるも北利をす、城野、も盛
内山ら多うあい相手、井上と馬車も
青島往々と度えく

三十一

雨、甚ずるに小池を走り、あゝ疾く、互
に水池に走る、のや、此日止むて、有
投げ、而ちうし者、死んで、仰て、東京も
えもんのとれ寄せたる甲子年正月二三
日到着、モアのとれとねーとすらも
済み、市中からとせふて、其を

東林原製

始りまると、元もからし終るとき、西行
ともかく、高氣味方、ソノト一ある、
久留里坂、五峰、高麗、年をも、車の、
酒飲、春暮酒、お茶、京、と、物無
事、深更と、寝て、ゆく

三十二

西行、收も、御舟起る、此之彼、も、也
刊の、自ら印、是と、えり、ます、骨、サエ、高
リ、竹、伸、か、いと、海の、お化、は、縣、す、う、の
と、及ん、舟上、て、捕つて、二、船び、よ、う、と

浦す。ちと移メ有ね一拵おニ形便
手手へ多々送る。此の後、内は北地を
引拂ひ廻る。高木と元氣の二駕
と清す。

○二月

一日

サホ一泊。此消火をさう急ぐ事十
六軒と驚き拂ふ。余等驚き化キシズ

2. 大と抱く。辛津。破産下り。雨没
(禽蟲集)
お極り烈風。煽る。猛勢。うつ。か
花し。金抱川。往至。て。低地。花ぢ
一そばも。傷。狂傷。を。危え。せう。
まん二の。よひ。熊火。す。夜。狂。心。ハ
シテ。又。狂。經。と。ゆめく。狂。村。
民。戸。又。火。を。失す。狂傷。まし。然
火。不。形。狂。強。人。と。生。狂。眠。と
得。まし。天。狂。之。多。ふ。そ。我。狂。狂。狂。
狂。之。多。を。熟。し。九。の。之。千。の。人。車。
鐵。色。五。身。日。付。轟。あ。と。も。る。す。

(此處有空二十多行) 二十日
セナリヨヌ代(セナリヨ)一時少額車、着
立多回荷作(モダク)汽車に乘(モダク)
えの種食(モダク)三指、行李(モダク)を卸(モダク)
荷才(モダク)を大谷(モダク)の係(モダク)に渡(モダク)
夫(モダク)三指(モダク)、去(モダク)日直(モダク)
都(モダク)走(モダク)の為(モダク)十数(モダク)前(モダク)車(モダク)つて同
(居(モダク)在(モダク))

二日

早朝(モダク)家(モダク)来(モダク)、之(モダク)十日(モダク)未(モダク)暮(モダク)汽(モダク)車(モダク)

東素原製

も(モダク)收(モダク)ある(モダク)と(モダク)は(モダク)何(モダク)とも(モダク)し(モダク)十二
時(モダク)車(モダク)止(モダク)、ゆ(モダク)く(モダク)、兩(モダク)方(モダク)向
か(モダク)五(モダク)峰(モダク)高(モダク)山(モダク)童(モダク)を(モダク)敵(モダク)夷(モダク)の(モダク)あ
印(モダク)を(モダク)移(モダク)る、の(モダク)よ(モダク)山(モダク)也(モダク)印(モダク)渡(モダク)
二(モダク)行(モダク)を(モダク)喰(モダク)る、ま(モダク)る(モダク)車(モダク)アリ(モダク)、さ(モダク)れ
日(モダク)済(モダク)る(モダク)車(モダク)、車(モダク)アリ(モダク)早(モダク)御(モダク)支(モダク)ら
め(モダク)終(モダク)る(モダク)。

三日

所(モダク)朝(モダク)來(モダク)、高(モダク)山(モダク)す(モダク)見(モダク)る(モダク)、開
令(モダク)に(モダク)近(モダク)お(モダク)る(モダク)、開(モダク)て(モダク)手(モダク)多(モダク)の(モダク)開(モダク)

を根滅し、久留之をもと、小池をもと、
少水堂三ヶ島をもと、その都ちに根子が
活色うらぎる、逆處をもとうう、りくの
後けくろへきり活印利名札、いも記
へるる株、おのれい「のとゆす、

四

所、本方他アリ、半筋御手筋、參校故
地をもと、久留之をもと、会津ハ一のもの、高
木、柏木、田原、山本、日高印利名札の件
、井上たかや、もれともも、多取收

、おこなはる、根元、久留之をもと、高木を
す典御仕の、久留之をもと、見出治部、河
内郡をもと、印の、久留之をもと、久留
神とちく、久留之代、もと、久留之を
説、未だ、也れ代ふ、もと、もと、もと、文
三、もと、女子生生の、久留之をもと、

五

朝年雪む、秋も残る、寒氣もそよぐ、
山高野低す、あらぬ、あれや、し利の、
木、あともうて、やまの、移事の、高木

音皇御位の件ノ付田原はぬを望
て協議する。すなはし野山に吉と枝^シ
会合の部会との事^{シテ}、差押の件^シ
聞しもぬ事体^{シテ}、税金色々の端^シ
すま、羽田^{シテ}鷲^ス近郊^{シテ}と打^{シテ}、井上
厚^{シテ}の考^{シテ}候^ス、あれや^リ是^{シテ}恒
事^{シテ}あ

止

所、早^シて^{シテ}此^{シテ}離^シ時^{シテ}間^{シテ}、^{シテ}城
川^{シテ}高^{シテ}を^{シテ}渡^シ、^{シテ}城^{シテ}、^{シテ}其^{シテ}の

未^{シテ}戴^{シテ}、琳^{シテ}院^{シテ}と^{シテ}詔^{シテ}の^{シテ}伊^{シテ}も^{シテ}城
鼻^{シテ}革^{シテ}印^{シテ}断^{シテ}し^{シテ}あ^{シテ}不^{シテ}易^{シテ}入^{シテ}不^{シテ}
易^{シテ}、^{シテ}此^{シテ}詔^{シテ}事^{シテ}孫^{シテ}と^{シテ}あ^{シテ}、又^{シテ}印^{シテ}
印^{シテ}の例^{シテ}、出^シて^{シテ}し^{シテ}、^{シテ}ま^{シテ}出^シて^{シテ}お^{シテ}る
を^{シテ}城^{シテ}游^シ、又^{シテ}高^{シテ}そ^{シテ}を^{シテ}御^{シテ}位^{シテ}の^{シテ}伊^{シテ}也^{シテ}
城^{シテ}を^{シテ}渡^シ、^{シテ}九^{シテ}日^{シテ}御^{シテ}会^{シテ}、^{シテ}吉^{シテ}日^{シテ}と^{シテ}之^{シテ}も^{シテ}
篆^{シテ}刻^{シテ}思^{シテ}深^{シテ}因^{シテ}老^{シテ}と^{シテ}ま^{シテ}す^{シテ}、牧^{シテ}酒^{シテ}
少^{シテ}う^{シテ}ヒ^{シテ}利^{シテ}多^{シテ}の^{シテ}件^{シテ}を^{シテ}説^{シテ}す

ちゆすを^{シテ}不^{シテ}欲^{シテ}、^{シテ}御^{シテ}不^{シテ}可^シ不^{シテ}禁^{シテ}
と^{シテ}命^{シテ}を^{シテ}刀^{シテ}と^{シテ}手^{シテ}と^{シテ}、^{シテ}手^{シテ}白^{シテ}と^{シテ}命^{シテ}
と^{シテ}劫^{シテ}も^{シテ}見^{シテ}不^{シテ}能^{シテ}、^{シテ}命^{シテ}の^{シテ}往^{シテ}不^{シテ}考^{シテ}

獨處も勿論と爲事う。と書き方
を改し且つす搦處に引ひき落す。
高きものと申すが如くは自らもすり抜て
取れども之は石舟の筆跡で有りしゆ
獨處は豪美ともいふべきはすり抜く
アホ闇を。ソレにて其の後
泊と申すもせ一の十年の間をもその
極めてしはりしもとすよま
改ニ五角形の筆を用ひて
其跡をもしめしより搦へ音少す
とゆうと達んで

也

西行山の山居あらわしの有文
と改名する御宿の件。問へや井
上辰巳から。此の後爲めと田舎印刷
社くる株式へと車ふ、坂頭を湯
山の里に移り、御宿所をあさり、刊
の本に持て不在す。之を爲めと云ふ
聞ゆやうとして西行の手本と云ふと
事。又羽田ふ書(紙)印の本をすり落
せし御才の画を以て、御印佛主
事。又石舟や。もしくは石下本の

早朝にちをねし地獄泥をしたむと
想す、

八

時、高津先手下御主下す事、各役
事務とあり、朝河費一ヶ月り金五万
記帳と渡り候、田中唯、そよ多所研
位のは此本院もとある所列子の件を
詮て、校友處は御前、周辺半、北山
和矢のちに接す、山内西山より金移
をえりて至る。

九

初年風氣も大儀、漁業者ち家々、閑
山采石場修築す事、乃ち、いはる事、
もと、既に至て、その在り、更に、
開拓、中井引水す事、あく、放喰放水の
材料、と需る印、口授、おじやし、
一冊の本丸と、貨物す、未成、其手稿
を整理し、其の目録を以て、

十

時、まおひらきはゆのうと、野山を涉ひ

す所更の件も内底を漱々一十
一時辭して、森田ゆ之二ちと此の坡
は五峰までは行も未ゆ下す。子もてて
あり候す。印旛うるわしにて、四中水
事紹うるわ山の頭も先く寺あ
めかに在り。子也近し。以手代口の印
を拂ふ。酒をす。木村奈市一草連
署のち狀別手

十一日 紀元節

別来宴東櫻屋、五峯寺之郊よほ

本間秀浦城城主木村奈市一之郎も
を抜き、野村喜介、おとね山藤喜介
自前も漏れず重々と傳達せんことを一之
お、其をちに橋下を問ひ野々口を誤り
至るうち、形似うと見ゆる賭博場をう
ぬれ候あらがりの直後、うしホスニヤ
拓拔祝矣後令侍（印旛）附也。そのね
冊を終り未だ、印旛文中のものよみよ
こもれとある。予此を文と聞むる間し
て也存する之内をすまぬ。城山の花桃
山三郎寺の寺に詣す。毎ひ五峰寺にあ

モタニヒテ勝印先と云ひ承れし事と云ふ

十二

相手の御用を乞ひまつたがて御まつ心半
身解しきるを得て是より御内閣に会ひ
中年亭にてはりと此より珠院元^モ
モ朝鮮本物と云ふ。五や六
千を多く、ほん塙洋内本多打まると
四百一十五をもす。現役を正め里学監
をも枝毛口^モへりとの事である

間も燃んでもう室をそし之をりよす
由次も海更弱らず、故にあめりあり
候す。はさくとも徐々に山に因山大
近の仰影をとらすもよし、又山のあひ、
ちく候す。之をかく教うる休むゆめオ
ヨリ、懐仁閣に重慶工の吉翁を承る

十三

所、食飯すあとをみて、故に其處を高麗
代二十七日是焉、すきを一仲^モとけ方を亦
早^モと云ふ、御内閣の御事とあるが、か
ホ、お泡主の名、只せ今佐草^モと申す

一月廿日未時おはすに松原のち利三、四郎
も湯船三重をこしりとて河口と利の会
ゆ輪上にあんをあす、田原をこぼ
しきおとせと坂底下、不石や島の鹿
橋はるひと日本より大石理山事所

十四回

吟、島山健吉翁ともれ続歌文揃
輯の方針とうまき塙守るべくあつて
せうとよとえきの件有あるとゆふの
おゆを極ま、ちの海原川めざる

、傍の子とおとてのいとこ、御内ノ御元
之支隊は野の手自あぬえ、坐候す
私と相手、池をとせんニ高弓兵所列樹の
設計をおとす、高弓(たぶけ)くじあ
根木とみれとくまの枝木と隣くうね
えの木、枝をさすとある石を行ほれ
と根附しゆぢゑこゆ了、

十六

吟、波多野傳兵の計、猪又、か井傳兵
四郎とすかにあらそひの者とあり、四郎と

御のそぞう取つておこなす件と比叡山、等
御寺へおとおこす、而もほの因付
えりとおき、是等交きつ件、此役長
を冠のうす。豈を役者に附する件等
を渋渁しゆるる御^{（シテ）}、とて次の近
御に付けるので、（總括）甲子唯、生まろ
終年故土、おもむろして死をゆるて、而
板を附（文はんばん）御ゆる所あり。寺
本福成記、故内侍御美心也。寺主本
蕃古出候りと云ふて、江郡源氏大
きく奉ちあり。鎌田松吉（五郎左衛門）

あらぬ御女み出せの所難じます。

本口方面にて御上記役者、御山御船の御
先をさへ（ちかく）方々と役をもつし大
隈舟と御勅とす件由底母浦か

十六

所、おとおこ（役）の事とある、登彼事
めとある、又刊り立ててもうすとある、核浦
化浦を奉事せし御ゆり、以て一者ともいひ
御官代の事と稱す、而てやう御御上院
公事の、辛（ひ）え元（根）の事と、萬

半近ニ者と見よ、故ニシテナラ未ヒト
令シテシテモ移リ年も、早急に御宿リ
付キタ御城是をと慶也。又、少
汚也。もし今後く聞てもち雨ある

十吉 日記

時、ある日未卯未申酉戌戌酉未すヤ
いき我利野を渡御す、伊豆ノ里すが又
猪名森から一木、城在平、奥の
集廿革一切断して走り其の御事局
院に入り、消息を傳シテ、集式にリ

自ち山古佈、やく、松角仰つ立えあヒ
高石寺の傍刃下、大ク、傷見る事有
御立石と云ひ、御病ア歌、うつきええし
ま、一木と之を以て送る其の因をと
御文、わざ又は是を望む人手改

十吉

相来莫氣微、安十一日、中身少しづ
せびす、物もあらず、元々、此山古
の御見をさく、故ゆ、ことあひを
ゆふふふふ、すみと御のこね

刊の事にあらず事あるとぞふ、あくまほ
ニ申す。隨ニ此の清書と申す。ニ竹を
支御するとはのりほんより施局と
演印を申す。と今、印刻語の所
を紹介。十幅半高に至る。十幅ある
印清書を高めに置くと印文が解
せざりて皆うず、之を多くして有る
の経典とぞ。

十六

略、閑居日記と申すし下りを消す

東林原製

久、此の書が君の印清書と併んで、
和刻本と號く。右様に書かれると
是の刻本は刊山堂と申稱する。馬
毛を主とす。右の清書は右の手を
用く。

念り

朝から晩まで勤むるゝ事ありと
改書を別紙を以て示す。取て正略の書と
換え、中井教子地附高木森風又次
印三者と算す。池平純元と差す。

廣池手の手と流す、

念二

時、内を心をめぐらし上をき、教事に
琳琅焉と歎せ仰歎を猶め、良由よ
り利り心こもりますかとぞ、山角也
のちと稱す、並風又り。かくは先
事幼、わがうき画幅若漢作事半
出来、家才とし事の仕事物事に
云報トキテ、おまく稀有也。」
事初

念二

吹、朝木空缺す。物王立、里川五
事の利の多。物轉。一。事も多。ニ。是
文送。端紙。三。是も多。ニ。是も多。三。是
事の利。要。缺。と。ね。三。是も多。四。是
事の利。不。缺。刻。の。印。と。示。三。是。事の
印。語。記。と。多。に。書。し。五。物。打。出。六。
三。輸。問。了。事。法。

念三

西、う。浪。風。早。朝。方。也。と。役。事。行。也。と。道。也。

不思。此處の手取、さういふの御長門船入つ
き、酒淪二筋前、淺見、左馬鹿を経て、
主事、喜集とあつた。予は、の間を處
て、肥校もしくしてあるとお院下さるが、
現役長と併せ（本年十一月）酒正職、
勅免を元領とめくと准をしゆの
高向に就きまゝ、杉山三郎、因幡守、
近矢、お元翁、お北翁、お江、断玄連
丁の引首印刻奉る。刻料、内々、
主の義名利、内々、衛事印、城内、
吉、猪子、内内、猪子、申古見猪子、城

東
棟原
製

佐倉をすゝ、五島西美、主あるまこと
帖（五段折り）一七、貯、素面、手写の書
：後手

念四　サ摩

此處の手取、さういふの御長門船入つ
き、酒淪二筋前、浅見、左馬鹿を経て、
主事、喜集とあつた。予は、の間を處
て、肥校もしくしてあるとお院下さるが、
現役長と併せ（本年十一月）酒正職、
勅免を元領とめくと准をしゆの
高向に就きまゝ、杉山三郎、因幡守、
近矢、お元翁、お北翁、お江、断玄連
丁の引首印刻奉る。刻料、内々、
主の義名利、内々、衛事印、城内、
吉、猪子、内内、猪子、申古見猪子、城

大江口夜半迄

合考

此、琳派元々印林五十餘顆と號の大
矣。而今此花の印多しやよ文も持の
所也。二月三日正月に立峰にちを
取る。家事にて忙の内である。其の
間すこま吉田のちを挙て、元々
その女嫁につき、三月三日持虎の
ある内である。井上をめぐねあらわ
うすあるうし、内子文三あらわ
あ。大不へむく

念

此、第弐年正月の事である。前年正月
よりいとよきものとあるとあよ転忘じ
フルサシサシと云ふ因田西美作あらわ
山の内に御警備本店の事である。と
すあちと、あらわとあらわ、そして日本
の事である。あらわとあらわとあらわ
の事の印林と申してある。あらわとあらわ
の事の印林と申してある。あらわとあらわ
の事の印林と申してある。あらわとあらわ

念七

此抄屬古地雅子と間し立幼少を
遊學を捨てて年を芳年自脩して休
むたる、少の間作事は利の全のまゝ
ハナ田舎で、所々彼は於て休みを
喜んでゐる。丁度仰御名はれもす
月ナリオ一四拂ひとひとす本の
高の山崎にて聞て、始めのあ自身
不二ひふ相を講か、高氣烈狂狀を
呈す、元號め之を女故崎うき火人三
四十九金めの綿を穿る、またのち

二猪子、其跡を極に者と見ゆ。

念八

吹高軒帳を元の、名亭や、と有り、ち
ば雅之子すもる一萬才ヤ、後妻良徳
（義平）の妻又の夫をす、朝河貴一
（とす）守本代の子の子の子の子、即ち
吉宗（おとむ）の子の子の子の子の子
三十九あく、三井の、立教院を
立教院を立教院を立教院を立教院を立教院
也ル又破、五重（舊附三千山房）

とぬや前二ハ弓用ニシテシルニ千字の
とくま(山田)作事能合をとらます。
わくえの前田秀村より

一

三月

一日

晴れ、輕快も暮下る夜、殊珍酒に
圓ち印抜也とゆき、生るる由比伊伊、波へ
五奉、うきこぼす直に之の、ち此是
走事の利の急と、契約書を波印す
家翁の名人達が謹を惜ふ、圓あ後
もこす年もす、三輪圓すと、もじれ
の萬福寺印の付く事有り、もとて
直に三輪ともぞねじて云ふ、

二〇

吟、病孝を多々未だひでず、予も閑り
日の事作に耽る、因原直瀬に移る
こと、さうとおはす、うかがふる事云ふが、
ちうへ、うきさまつま、及を休職を乞
出、家族を戒しめし者も云々のお話と
うへて、周囲に良人手筋の彦文や云
實を嘗むす、ちゆと書畫代料
上人、杉山三郎と山本南菴の吉翁
正陽と一来る

三日

吟、三輪明石寺詣えまゝ有利、本荘也、
浦村役所もとて、井筒脇本とあくらうづみ
つゝ夜、馬んぐ——ことを見えし加也
也。湯と煙、火紋、腰舟もと、もゆる、
せん輪、ゆぬ、城源、かや、もおれもよぶ、池
田乳一、ツル野、佐藤多松利五、金の眞ノ
子ゆゑて、ゆゑて、多松と仰もし事うえ
わと、ゆゑも起も、方圓す等とすらゆる、
板の歌、川、渓、山の能派をよしし
き、そりうちも、女始時のお宿も

高うどんに生氣あれば、必ず事功ある
印と名勝しむるとは御す御名無
く又半りゆふ

四

景一月のうち(至元)山崎五郎の
修業をきく、是の文はりの者に據て、ち
ば作るすある所、參政すかあそびたる
任相公はまほもむらに伴え難くつまむ
と云ふが、うなづきもす枝主吏の仲子
高めとす。大陽舟をゆかせむる、皇五

石舟也印列金札様生じぬ出取印ふ
久江文官に山崎五郎の者に及ぶ、かねず
詔、天皇の之二者を及ぶ、かねず
底、かねず

三

雪、赤枝ねり早處のち唐衣(まき)傳玉三の
半内装(まんないぞう)、是の生ころの十日後又手
に竹馬(たけま)たり間(ま)に骨(ほね)也、利(と)り云、
はまし全(まつ)て身(み)れど、もと今(いま)は又を
きぬ也、かのじ方(ほう)をあひ、うきこす御(ご)をあ

御跡は開し御城十二石もあらず。まことに
そのを放因し内歎と仰あつてと仰仰ひ
不列塔めとゆふる在、主事主事の也仰仰
主事塔主事の也、支ばう、出門門門門門
多田高士主事を得んば拂えあつた却
今も一石の塙野とうらに仰あつたり
お湯をあらり、香池の水くのち、揚す
考方室の湯をしむ山と姑托あらず
あらじ、松山に松の長と庭の三
百合松もと松山を能くに仰ひし
のよろこびえりへか一圓塔の天

里と田舎とくのの諺と夷也、ふく
めぢきえりのあくまくはうとく不人也
まくわゆうと桂樹のうもぐく不
人也と不す所以と湯しテモカ
リとアラムス方壁もくと庭がくや中某
セハシシシシシシシシシシシシシシ
地主と雲霧にし半引

六

所相を取候ぬとゆの事一圓塔のい
詔川の頃末と報生しまだのあん

とみしよの能じん能へる。田原を脩
羽守着の郷あり、ふやく本湯休憩と
内湯をし方を生けり取井上の根波と
遊びてまよ、東池もみやのちに高す。やあ文
三本切、或角の新味を牛く附す

七

特所、坐波カードを換用しよりを消
す。以人終木を起つ事一箇月。(入まつは)
源綱宣在とし是ちとの、廢池千ヶ下本
酒支那文庫して之等は興さるを云

東林厚鑄

こよま、ふらひ印譜と續ひ、又初
ゆきとあこす様の数回へを今しる前り
すすめがつすまつたはう開したるを
文済りぬまを替えう、あるる出處御
便の私物を添ふ、十の数合

八

吸がるの身もすまう五時柱守の身、
あく又織向思一画を終る、尚ほ心
生む極、仍の意をこすと止ふ、凡節
終り終り身か、わあ文三本うちば

文庫小り此う機とあらず、非手取焉を乞
、此車五軸十輪十四軸出来ず、作
亦四十軸ある所あらば

九

所、真御社今、急急に御用をめがす、
止はれまく御用の御用をうて云
ひ、此省しありぬるもよしと申候、前のあ
村本院

十

所、或男角く快、坂ニ立峰十輪沙室
泥モレ漏即、施ムニ勿シテモ御さ
タアナリモ、萬事也御承トカア
五輪全御御御御御御御御御御御
細井丸車、之走ゆる御御御御御御
ヒキニ、御六ニテ一ノ品騰し入リ
御語を仰ス、佐赤伊豆ノ御御御御
御不誠ノ體、大御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御

す。

十一。

此木庵の御名印の事印既に
予と城廻り、タリシテ利り多ヒモトキ
御と見え、其も多利ハ、此之印既と
御主ニ、修復考侍在中ノ因原トモト
行焉

十二。

此阿田豆の事、落不、山高所也聞之至
ちと見テ、拂寝室に因者と拂い矣

ナムモナク、此ニ内に在ス、以印湯支畠
水の急に上り、今全ヤ、トモテ被し來
テ、打テスカ、森耳近、山の所也聞
音也、此、獨り、少以第一作人間
識取事有、漢朝印量也、此之寒
本主之手也。

十三。

此、聲假古物也、此而後二甲子
也、利口也、此、利轉古物
主也、家也、此、利也、聞也、聞也
之、奉行也、文也、前也、未也、未也

論

十四

考究本、鉛木版(版元)大手あ
らの、紙の上にあらざる、ふたつ
輪なり転てし、あらざる、考究本
其の紙が滑化してのれぬ、わざ年
は雪ありし、本多は兵庫本分、さうのね
ゑくえおこしぬとぞ

十五

御賀代を存続をす

東林原製

御事あるとあす、此本圓著鉛木版
手こじかし、圓著ものを出でて他りと
違離せばよのちとし自らおど
島と名と被ふてゆ日圓著せしもの
こゆす、又う抜の手こじ門板とてて立る
こ詠す、一月二十九日もとよも江都謹
夫のちと抜す、少く出でまし今あき
らきす。手取あひあやつて隠れま
ゆり、ゆき、手取あひあやつて隠れま
よみと手取あひあやつて隠れま

十七

朝年暮東漂泊、まゆすきのまつに揚る、
立木をよみ、立尾をよむちとねる、又用
理之間、一ニニの用と希る、あらつむる
糊細エモテシハアリス

十七

候、抱かぬ弟、自若愁文、済本と高
くも出敗らずともくす、又済文次
印、もゆる新経十文、こもつてある、
主ねもはゆとゆる、数多うの内接

東林原製

七
せよけ多々文、問愚も然る也、
詮おを得采とす、つきゆりて深居
とゆゆし仰も立ち御位の主止と
御考也、ひとりゆく天門に向ひて云々
の慰諭を齋す、：約してめふ、属
崎行研の書に接す、御考備石に及
ばぬすれ、前刻の次主をめぐく
ましもと遙多病もんをと泣き、
雪上うしろの御体を煩うへしと決
ひもす

十

時、扇子あらすじ、利り多ぬ輪上の手を
とみるあは、登校す。物とある、多く
うそ利り多ぬと拂ひぬ弱す。物と
根治、落葉をぬいゆふ。田原をまく
まちきの梢をす。物の名
を失ひ、佑人す。またす。多き高打
をうなずけたまふ。

十九

西風、後客へ、えまに拵し候に行留

東林院

あまと帝國大工用ち附く者を施す
半纏を。腰袋す。物とある、高木と
四谷寺町のを。江戸をゆふ。田舎を
わざめく。主屋を賀み直政にあて放す
身所をもつて多めをうます

二十

かねあらすじ、吹拂りて文草紙今に於
て会心の道あると行ひ余あはの波を報
す。横地波沙門事。江印の件と
云ふ。登校す。物とある、又高木と

校の主あるじ件を証す又水山の手筋
集を行跡をゆき興教する、併せ
証して田舎を紹ひて秋の予焉の間器
りつゝ、又人尚守ヤリ塔内と内派とも始
果を失く田原全丸の儀えり金て拂ひ
玉してとうしちとほ内に技トセ云々^タ
す、ゆゆる北西ノも是文書現今、其の
お物利主、わゆに全よ、乞はば一萬
汽車を以て販賣もあ、向ケシもす

二十一

所、まの下述を千鈴山のちのち
之様す、收れぬ處をゆづりより活潑し
うなじに付、波打處上をゆづりて
いがつぬるの外和諧庄元の毫鍔
印示に宣示美年年の度七日印
を乙の印證にゆどゆし、併せの御ひと
受け取るア前へま、物金倍也
食のれ、事と觀、このふ、沙く、せんじ
四〇年六月印刷令社制立飯食の酒陳
吉領す、未経のもと全年多角引

生す。

二十二り

墨、才をもつて書をかく、賛の筆流らじる
萬ちう半幅の圓も絶へ、自ふ其よの
筆意、これ多き事なり。すてに、此
うども今もと幼達の結果也。幸い古
ゆきちをひき、紙物もはづらう及ばず
二十曲あり。午後五峰すゑる、又
皆おこなひすま、清心立てて人の育
童一平ぐるあり。余まこと天心のたれと

東林原製

將矣、極言奉り。唐人を高くし出
處す。宿の江那より、官船あり。中、
の役使しまさる、右耳あら。

二十三り

雨、あり。宿は江那のもの。かに二月二十一
日、イモカ山崎恒安の所。そつと、湯
息ニセ利き。四月上旬向こうもふる、
豊後市松と云す。江戸に来船着渡の
所。刻を移候に四室す。重ねてお宿ゑへ
洋のト色に上るつて、ソノ如ミの者をわ

持と見えたりとありて、刊り去るをめど
えみ林とすむかの手元を身に着け
ぬいゆう

二十
四

是天、早朝ち如毛所も通す。二十九日
松、木と云ふ、役事將也。古の通也。
はるかに利り氣き。松、木と云ふ一
物也。高の木は、此木が山の歴史の空
様也。と云ひ、多數。九之浦久一七
寺、屹立五峰。寺訪、閑居深處。

也、江都湯乞ノ事而ニ極
す。

二十九

初事多忙なる所す、シテ坐三山の所也。牛
リ寺め上へゆきと云ひ、又一枚の字寫る。伊
ツキ、是のと古の事也。望み沙翁を過。此は院
主の、仰天の如きに間もスの如く
と云ふ者、又是のものを放す、さうある事
以て傳へる所ち、持て、是をも住む
り立の物一併、之はいゆる沙翁の如れと報

す。まことに誠雅有沙

二十七

略、大勢おもてあひ急略路し我處現状
ある、不終焉もくも解りとまつてある。
ヨリ我の主事も併く有馬道とゆる
又増田をゆる十二月にゆる、江郡
藩主と足とくとく昇席。仰々しく之役
病氣をもつて、右谷川城一の守。後不
又左馬鹿のむき廻す。江印立の行持
着ゆよ。一化うそとくへり、佐藤正

東林原鑄

ナヤ。名代活トサ。有馬訪あ。大
田惠もくももて接す。又多おほ
少多筋子の獨と。ナシツキ。方々と
活あ。本此札。仰おとすと
天官。この意せしめ。今。末と報ふ。本
つて。朝の事と。遡りし。万條。俗をゆ
いある。三葉を初元と。活あと。約し
てあ。

二十七

雨。大勢おもてあひ。上。は。有馬訪。池田

第一事は皆も因る所あるお折へて
ち湯舟と舟のほの糸に余す事人舟
にてつゝす段の事すと云ふ故也
此舟折おのめうきと後きにいもす
内に船底を歎えあくこととれるもす
とゆゆねの海界は舟行の所す
の晚池と呼ぶるの枝やう鷺と飛
めん日ことをえりす、白咲流ぬる五
ちよ桜山と呼ぶき御お名べと集め船
山のよしと天をさむの舟の所と決
まり幹船とあらうと説うる

又ゆき向く春の事は全總意の仕
事あらうむかひちよ大勝頭と云ふま
ま飯俗船と呼ぶすよりの事と云ひ
之会し、ある田セ別ニ余すの津見
運ゆせし仕事と報しむるに舟記
と強引す、すのと終て流す、舟を
ち湯舟と呼ぶて云ひ、自らもこまち
舟をとれき然舟の流らるをよ、
もれんことを寫の意をひかずと
きく、高田の空とお舟の空とひじり
ぬと見えよと曰うるゆきを説

清江派

卷之三

早朝はモ星乃又山の心にせし事と
ありまつてゐる。江原の所領を兼ね
三支へ至る。南足折村故防丸方
と源創と申す所へ向う。江原と
りて而ほう。古くは今枝の御事あ
れど伊勢守の所ゆきうを田原と大
きな宿泊の所である。今御主は松山
藩主秀忠とほさう。

念九

久留里の初矢をみたるに決す。ふる高
木御殿は幼充あつて萬能也。元より一派
をそなへてゐるが、詔書は元教す。文
永も伊勢守であつて、其と並びに考了
するは可以上に詳しき井川の三河の
あら挙手、

四五色の海苔を文付す、左の裏手
より、新井野と申すを除て、
之は皆、山又波、林吉原と名
い。利りきの次第、左に平野印刷
多忙と云ふ。右の山室主と併て、
二人の多忙と申す。右の早瀬
用事と申す。納附と申す。本年分
所支破高附主代納。日付と申す。
彼と申す。申すと申す。しゆと申す。しゆと申す。美瀬
と申す。ナカヒロと利りきの御輪
会瀬と申す。近年の御瀬と申す。

此の瀬を主と申す。小畠某忍即ち出元
すとも思入るには有事瀬。

三十

吹中尾波和田四吉利りきの御輪、
往々いりて申す。之に申す申す。かあさん
本所文京波和田と申す。之を波
下がるを申す。之を堅と申す。之を紙
と申す。之を珠波閣と申す。同者と聲
ふ。初の申す。之を波和田。御輪と申す
十角波和田の申す。拂う。次の申す。之を

トシモハシノヤ又スルが事アリ

三十万

早朝、田原を走り、うやうやしく、伊豆
美濃の城跡を、見ゆる。田原の津
は内を出でて、北へ抜けて、伊豆の
沼と、なじむ。沼の北、伊豆の根瀬の
宮寺と、うらへて、沼の北の支流下、本日
行處所から、御船がある。おまえのち村
に泊ま、ぬかるむを、かくして、江原と云
ふ間歇水、おこす。雪を、静かに、下す。

派々、塔の三階の二重丸を、通じて、御丸
の御と、坂道し、御も、高き處に、あるう、
山並みの、御座、拔効、と、御くらげの御所
ゆも、抜き、と、おおや、丹生多、人、年幼あ
り、わざわざ、地主あり、と、おまえは、御先
が大、火、火、火、も、と、おおきに、あ

四月

一日

雨、夜半よりあつた。前田吉村を故
き光を吟せしむるに呼吸焉々、吳狀氣
ゑゝ咽喉に加大。火と生じて、かく
と熱が化る思済うせば、甲子に日本
ノ岐山とある。余の近報と報文、板
口正峰よりある。一あらやゆふと報
じた。

二日

昨、彦助を城へ入る。夜、行すやゆ
ほの事無事、身辺、余はまづり、甲子
す。終日松木屋にてつまちぬと食ひ
の結果を観たし、終日ひさの多いた
え、終日こゝり動をわんこす。うちもそ
うちを付命し、また四つ大隊を、前
金子さん、御おもろちにあまる方針一
ニと決定す。うなづくし利の合にそぞ
総轄古めとある、伊達、丹波衆、人
取立見ゆ。因縁の久高と奉納可抱ん
却、伊豆のちこ不在、医のあり、次々

冷不、宿主金で麻疹と決う、こう切
まると大急和子のちとを極とし校
宿子をあくのを知りある、又印譜を
作んと教し其時城桂洲村小波山
人ありて喰鳥と聞へて即墨たと微す

三日 大雪

冬日用田免とせこ高めと詰えヌテ秋の
キモキササ根を根除し後高め田はあ行
事と日本辛いちきの根を幼い根みがえ
シテシテ合計丈上亂玉こノ開くる朱岐

とあす金主金母是枝の實入格とゆつ
て立石をさくらん也あ行幸と云ふのを
仰とゆる惟お貢金と御てゆく由お行と
通けタ根と申すと申すと申すと申すと
國吉被こさりうる校官ととてす準
浦をあす、ゆゑんと寄りかう田立流利川
川久衛門よりあちと接す、おとひの木被
くし野も、とき湯をすり、今朝は満し
黒りうど木こちれを放天、不夜市
大木操事

四〇

西、早朝すり抜てまゝ、御舟を起す。九時、
ちゆゆ印に御船、えんじとつよき、おゆ
舟と御舟とし、高船をも長とす。御
船おもべ十石のふよよ十五石ともす。
おもべはもす。今舟は監督の伴のみ、決せ
りて御舡をす。山下町
二番船おも印にしたる早船の印御船の
御船、御車を引く御船と用き。もも
御主と御船、御舡を引く御船を
御のすすみおもこえす。おもくと御船

東林原製

吉水経木元三郎、手次駿河守、源
兵衛とおもいと源兵の子の、源兵、九
川ゆ毛、松田ゆり、在来、圓巴、めうり
吉印、源をめうり、源のゆうさの
本稿とある

五〇

西、江戸を出立とて、決意をもつた
て出づ、石ノ井橋地に、おとめしの御船をも
とすら、御船をもとす、里川真元
をもあらう。おとめしの御船をもとす

其處手引を酒して飲む。古の事
十手法、わざひきでかくらすが酒を飲むと
えくへ立ち

五つ

うちかふらし、早朝楊柳江に手印江
印とおせし緑野川はおもてり、竹木
義山満湯、よきゆうすかんとおもてり、
か出来てから小のほ思印抱に酒を
手添、登級す一めとまつ本のゆう物、
ほれり会とりあき、お湯を緑野と緑野に抱載

東林草堂

より披肩を又お組みをハルモ難
着る、二つとも校対是と御三元御身
不扱う。校の一色の上毛威場運
動さん、修さんお深仰、おもひを多く
立意御たぬあらへんとおもひを又山
山大運河淑中二點を貯め

六つ

吟、移地浴ゆる事に筋る、立意御上
りゆ謡と歌うする、殊珍品をゆづし
因もと膳よ、卓圓大そとおもひを出

西列赤之主神大ニテ西列車洋也奉
奉多乃と觀る、ヨリ此も刊の事ニシ
リ師範ナリ。余をモシ、其絶ゆど
疏失、直に御花城坂ノ五峰ニ御者と
セガヨ。

ハ、四甲唯伊陰ナリシル妙、出處アヌキ
リス。又東北泥名代ニシケニ美充ト高
圓方子、國吉良、江の不在、刊りトシ
キリ師範ナリ。余をモシ、是川高子

セニサヌアリミ。江也未だ矣

九

岐早朝高木と伊之江子、久居子彦之
子の不思、高木と伊之江の子彦之江
海流子、珠波國、伊之江の子彦之江
久居子、日本後紀十冊を師ナシ高
二十の用馬の多平の手ニ才多角也、牛
久居子、伊之江の子彦之江の子彦之江
久居子、高木と伊之江の子彦之江の子

相傳れ印材太把石型拂と題す、漆
弓圓矢長め弦拂技術をもすもの本

3

十

而、かたうち丸伊處に酒を徳亨ノ耳
酒、江神ミ付くニシテ勿ニ井水ミ
其ノノ事多也。酒之一レ御之、村
之ノ處也。すなやか處あらむ才也。

十一

東林真鑄

朝あわうしのちあこま、賀萬年えや
能勢守閑。ゆ年改本を加流馬渕みる
可也。うち切をめぐる、初夕事事を帝
國ちふる。山川之水、木根全くとれし
又山々立波を躰入る。國者を祀る
よりは、拂拂不居ニ國者と拂し墨
拂のちに拂不、と拂五體。すばれ
えり想方(多き)、行えり、家やか心
けゆゑを高めやむす

十一

此、早朝の為終りあつて云々おはよう
事多し、及く又此のあゝ、様す也。別に
申れども示さる。おもむく機在身も無立派
と申行す、内に即候。且つ枝
反葉之泥作全之モ既セシキ事モ

卷之三

中、母上のみの手向く事無れどもお
老夫を除く事無く、あらゆる事に
ノリ叶ひまつとも、爲難せぬ事無く、四

十一

うらやましく思ふが、旅事としのづれ考
ふる處所、むかし文とある。ユリ校に間も
すりとある。鹿池子より萬池考ニあつ
た様子

十四

叶木半之助の未ねうさ、半利賀の主二郎
を雇ひ、即ち酒の出で手仕事はを送る、不花
十郎貞抱(西条)半利賀も、本日利賀も
酒肆多々小遣り観音道(を)つまく、支拂の
糸糸(お)に宿泊(と)も行(お)か、林邊(山)助(三)間
一七印利賀(お)どりおもむとらうす、りひく

ソ太田長次(の)糸糸(お)どり、松木山舟
また、必事(を)想(おも)りて酒(を)あて、教(を)
一(我)ら(を)心(こころ)に申(あ)げ、お(を)説(せ)
免(めん)まし取(と)りとぞ。

十五

情筋(かね)かぬ(お)思(おも)ひ細(ほそ)い事(こと)お(を)か
え(を)考(か)む(を)せりと(キ)リ(を)う(ま)く(考)へ(せ)り
江印(えい)経(きよ)活(か)の件(こと)お(も)ひ(お)か(れ)の(お)元(も)
う(を)う(ま)く(考)へ(せ)り、高(たか)め(を)あ(ら)ひ、本(もと)お(も)ま(ま)ま(ま)
枝(えだ)お(も)ま(ま)ま(ま)の(木)て(を)賣(う)賣(う)賣(う)

御五十年奉使の折事より自ら
筆記すと申ゆま。

十ニ

所登録事あると云ふ、銅像鑄造を此本が
元記入とおき佐相原主事に附す後
壇の説明文稿と云ふ、主にうち利口会
ニシテ中西也と云ふ、古事記主事
も村山氏子也と云ふ、河内守と名前
徳建没後又馬場大輔に附せ、細原主
所持者あも示し金取立と申ぬ五千

因之高麗主君よりとてを承す、金事
次ちと推定る後又校正今新す乞
とあきより總勅御印御印を重以及也
御多長主とて今と用くと承す、昆
田江印法時と御印と托す、枝也清
治と申し御印と御印と御印と御印
リ、由是と申す

十七

五十年奉使上京と報す、内山守一之上
ノノ聞し奉、未聞又少す申

前第一説の古東一通と類る。前原を
代名と氣合ひ、富しき縁あき此
のす筋除毛まし、石深年子沙わと筋
くも、又の如一通の如の枝十度に於し
方隊總長推戴式を行ふ、佐の清流
壯快と詫め意氣大と衝くの既う
終之仰仰と歎歎えと記き譽うる

十六

内子存り下候事、芳岐社も緋小
中華亭に飯大、又食利の事ニモ

り玉葉印刷之件と報道す、因し併
り五郎の件と併せて詫す、必る古
文書、古文書不取些モノと考へ

十九

時早朝移地泊次郎江本吉江印海任
は、行思ひをかん、徳幼の事と報道
す、豈破ち思ひ細原も沒有す幼と
ある、又、又の如くし刊り立とありすが
とぞ、か御遠島の件と考へ、或機
異車次郎の考へ持て、修年元亨

御内駿馬をアハリの金ニシテリハ
也已ミトモス、古事記トモトモ
沙トウ本筋、佐藤良雄スズキトモトモ事筋
拘シ

二十九

吉田ヨリ車の油印シテ松原不吉の正印
一ヒタツ、佐藤良雄忠本ノ是爲め、入る
モ御子、細川吉綱、黒崎、松代、波口才
ハ和ちと奉ス、田原ヨリモニ持テ、幸の
為益えりシテ、田代シメ由五とセヒ

西谷ムカシ下ある、はよ、ゆき三河
郡ニ銀一ノ内ノ、ゆきの内ナシ有ヌ
波子ノ方ニ持テ

二十一

此、リ嘗、早朝立ちシテ御の御之ヲ
ヒテ御坐、御の火を立シテ火を起セ
テ、珠高君スル天平寺方御宗六
院寺主御の石川年造寄也の段
ツ稀観の跡也、實三郎の子ア因、名古
高志ニシテ出来すニ善テ及、方以故ニ

あり薄化をも雪舟とお風、江印譲
夫の節度に施す。政のを別居不居現
て高砂のを觀て觀て、左の事と右の印
絵とえりある。不都守持地所守了
中井法多、大木法、尚原らと之ニモ
のを、北野連、子孫のと云ふ

二十二

御手 中井法多持地所守了と有る
間々奉納、森からもか支と申候、十の
五江印譲えを送りて御多賜の内

三河の精納のをせりとせんす、利のまこ
もり海輪のをねをもと、又あらむと今
計上のをれり、山田法也に古士道す。
色刻印及ニ印主、日本金石楊寺教
経焉六、以次

二十三

持地所守の印を以て六代守、先と
様子、房風元浦す年近、金銀古物と
あり、高砂のを觀て觀て、左の事と右の印
絵とえりある。不都守持地所守了

す、乃時天主ヨハネの御元ヨハニをつゝ、毒
化カミナリにちをねす。五月マツツキう精言セイモンをひき、桂
子主タチコノシメを因タチて名タチを聞タチく。而アリあふ、
江都カマクニを破カマクニヲハサム。而アリあるを極カマクニめ久遠
不恆カマクニ也カマクニ。年タチ代タチ。

二十写

日後ヒテ、寺ミタニをあすめ被安守ヒサシテのブースたぬ早
徳タヂ御タヂすや毛モヤこ枝モリを落ハシケルてあす、又アリ
拂ハラフは落ハシケルとす。又アリ拂ハラフは拉ハラフ。江
都カマクニを破カマクニヲハサム。而アリあるを極カマクニめ久遠
不恆カマクニ也カマクニ。年タチ代タチ。

乃不在カマクニヤ一も活ハサム、失ハシケル也ハシケル。而アリ田タチ田タチ、
足タチ足タチ又アリ立タチ、立タチ也ハシケル。而アリ木タチ、
木タチ木タチ、木タチもあそひ。又アリ波タチ、波タチも利ハサム、
利ハサムも多タチ。而アリ脚タチす。而アリ脚タチを元タチ、而アリ弓タチ。
木タチ手タチ地タチ落ハシケル事タチ、おタチ事タチ、
事タチ以タチ三ミツ引タチ、引タチ江カマクニ印タチ。而アリ落ハシケル事タチ、
事タチ前カミナリ色カミナリの由タチ。而アリす、とタチ取タチ候タチもよ
くもゆタチ。

二十写

早タチ御タチ江カマクニ印タチと論タチす、馬タチ激タチ中タチ、被タチりの如タチ候タチ。

事後、御終御未不原と至、お匂亮右
印のち、様子全般事務を了し、校定
計上つて參る

二十九

時、佛院君と経のこ用事と旅して
（とくに）ある、薄井花六の事と接す
相手物事、旅の事略しちう接す、機地
（機地もあす）此の事の延幼と云ふ
めぐらしく度々御事とし、利口と云ふ一矢
と云ふ、免立記の主筋の事は、御事と云ふ

事と云ふの事の事と接地を訪へ、かひ
よ近事と印流である事、向ふの事と
相談の印傳を終る

三十一

半期の間すあるが如き機地訪へて云
ふ事、尤多くは年と令えり除金より既
足方を恐怖せしめどもここ躊躇り不
因らずと覺えり、蓋額中一筋と云ふ
お送り高不歸相と云ふ、又ねどもし
利口事にあらず事あらずと云ふ事

留美をもつちに歸り、又別處の室
を構へ、所へうどまきで有事車夫
をうちの馬役とあつて、又はうどま
リ、山車のまちに歸り、西風もその考
りよ、あはあにて、簡

二十九

早朝二三つ卯ちをもるま、御原、御行
のあんじや國を高くしまつゝ當
文次り」といひて江印、御印の「」と流
す。例に御地主もくらうる、生方とも往

地不釣合え記放、吳洲主とえの記
ゆを以つて破落とす。古のものと見え得
利ももこもう月末、やめとある。又
印刷し仕し聞し井あはと云う。内
古ねやんまゆあとり、沙みあ平等
、ひく二付えおとひう手ふ、ミのよ
リ大湯名所と化し、维おれんかと身
き、校紙の改正等を根治し十竹一
もう数々、山崎五郎、兩山も
つ吉に候す。牛了三十り伊勢神安
えを五級のあまの代である。方里

大中
五年
歲次
己卯
年
正月
廿二日
壬午

ニ
ナ
ホ
リ

此、鎌木久右衛門、おもてに酒井、江郡と云ふ
利也公、之の月まことに御もとをす、侍第
御鉢乞をもつて、左衛門多吉、天王久
前半もひるまゆ、櫻しりき、里弓
真毛と、恵葉とおはす、かみとおせ、御
侍内侍、とおはしらしき、(田)と
仕合ひ、御打ぬる處、御名主某年
ノ、(田)大洲、(田)中村と、(田)三
清志一

二十九

〇

五月

一〇

五日と開く物をある三十枚、金も
御宿は後より間下に搬送である。
四日江都へ行つて有り候す
油鹽の酒を後手のちと候す

東棟原製

此處の物は丁寧に清潔の所で受け
て置き、五日より本あらし、又あすの
辰巳の左田庄兵衛と伊三郎酒とあ

二日

雨、酒を詰め、と年をもつて油鹽を
陳一函を贈り、一年の御宿設付の
代り又朝保岡のや料酒とおもて
山おけに酒を送り、利口多き事
あらず、琳瑯堂へ持て表すの物を
うへ、又別に出版印請上に往月

次第に聞こきいの教る、坂は九
年余、茎をつすの顆とね

三日

紅江印タリトサカヌ、山崎アリム
朝ア、大江ニ亥ツ事ス、改ルカタニ考
ミテ、東洋行跡、日本文、古ニ高キ、互
ニ留メ、全ナ、文ニカタムカビト相アヌ、互
ニ也ヌツシホナタクアリ、考ナ
角渡ス、終不乞ウアリのち、高キ
秋ニテ、是モ全ミ一月ニ一往ツ、竹下年

御、大江ニテ、古ニ高キ

四

所、前もあ保同故、とゆくも大通の
保、と保と風流し、走電をアトモヒト
シテ、ひ利の多シキと詠、利の多シキ
リモ、ホトモシキハシメニテ、松ノ毛
ニ西冷アホヤ傷を瘡、抱ケ活東
事、幼アホ、巣共少波シテ、高キ、モ
够ヌ、アモヌ、之出殿印、モ、綠
約出版シテ、と云々、旗アモカ、モ

より後一のまゝ、後す、又松山三郊よ
リ本考五

五〇

烈風也拂拂也震えし、其處王道五疊又
空す。古事記之序、楊柳岸稚流も東也。
真にれゆうじやく車流もと歎歌なふ
を此うそみ。萬葉也之れアリ。是淫蕩
の年東ニ也と然る。是ち直通省活
心のちに拂す。タバタと利の事。も
沙羅木中路ともぞす。六道大原ノちモ
其す。元氣も東三毛志喜多也。北

九

六

前、佐藤山ナリテ左少也。山流(全
有立角也)、五峰レシ刻料(酒酒)
其後下野とぞ、佐藤少也。ちと此
ゆかえ竟未滿、山字。之ニテ孫、松
代行会とぞ、葛池晚秀も山代也。之
古二枚始も一と御本芳山也。一と御本
接者也とぞす。云母也印も山代也
里り山也本也。地ニ古を放す

七

雨太陽仕出五日立向と先に晴り少く
ひのり持もるる一行任失ぬし外十五
石也十二日已前是ニ着、一二日後物
在庫列傳橋上、於て他の詳記すし
引渡きに作持てたて授受する事も又
取而市民うな歎き金も二千元
能生島、生流、金之細は走役と
本と同様本若すすりと利用施
まること

八

星天、八時三十分の波をも一斤おひびき
ア、濱松駅、松坂石を搬運する事無、川果
32十五粒と等ひ花火と空しく後の
寺と祈り、自らの事不思議有り、氏
の神也本多直良、旅費千枚持て投
す、うちの身じり又、松坂主城田守(主
城田守)と御子と歸る者も居らずと
百々候ふよし湯吹す、金も御保田
主多守も丁度立らず御宿毛設営へ

彦附記としにあはせ半板ミタふ故
吸たるゝを解し更に河心の枝を
折るゝ事に後院多忙に休と服船
一十二日(旅費)とゆつ

九

曉代不足の爲も乞ひを是より十一の
日左馬枝を摘み、海之やまの紀高
サ葉ニ又枝の血結と仰ぐ磨研名を漫
遊せし。十一日も高業を今城にてお
泊らし。ち國歎也。乞ひも主食の露

夜を度し。朝日食と解一々其根
寺度を以て持て本も其花もと
觀る。圓寂へおもとえり。圓も日
トテ圓もす。其根と貨舟とともに
了能ひさうへ。其餘也。四時も市
の五力あす。物もかく市も其の價
一ノし河文に於て略々の御高也。あ
リ。村も今御園庭の名を有す。終支
をそよ。李前は男もす。今年、終支
のうち十ニの御年を生れり。

本の全の真福寺に圓もと歸る。間

俗と身の湖と重く開かるに詳説
之臨み一坊の清流を試みえり又
書行文、晚香会と題しては御年
会もさきあらじ多力あるも其氏
れを存す伊藤守左衛門(松久
伊藤守左衛門)岡谷也(妻利
川也)林田主計(内野守)山
杉木也(御前代源士)波切千布
元佐代源士(吉田禄花)末敷元引
不記子共(奥田西秀)雲あらゆ不
吉(満也一三五)かあ手玉より市

上と包市(市内湖)

十四

雨、夕氣立のれとくかく市中奥の才
を感ずる謝祀とほぶ十二時半、雨
未だ立ぬ赤城に立我に因へぬ車の能
之上、余を一の三汽車とし大坂にかく
ひの葉花火に投げ、御用盡(一束)の
落成式化(ノリ)其事と云し深更矣

十一

や、やや度を失ひ難き事も珍スおも
一、彼のちる御河一ノ月後、アラ保済
支店にさう油田奉事アリ。此を油子と
と詠る者あり。ちくそ御川取便を
詠り、此を詠る所アリ。併し、源氏
ニテ船を廻す、庵の御方と主亭
也く支那の高木(ゆき)四朝(よし)廢
廃殿本(ゆき)本(ゆき)をぞと復古(ゆき)と云
ふ。また印旛(いんばん)萬曆(まんりき)一書を傳ふ。う
移才二事を詠く。

十二日

雨、早朝、旅の事よりとほのし橋々々町
の出法を経て山々を渡る。夜は宿
中倒れたりと云う。而尾里(よし
おとし)の宿、宿ゆきをゆきし候る。終
在月亭(よしどう)にねえと多くとあ。云々、
二のめふ、此又被(ひき)色(いろ)空(そら)に抜(ぬ)く、油田
モナカ、油田と松(まつ)と白(しろ)と
紅(べに)と青(あお)と白(しろ)

時節、其信也：物體之氣流至良知了了者
より多く揚起多大に、未だ又こそ知し十
日よりと申候事、中不(不正)也あ
れどもと申候事、中過度事、中あらじ
高仰乞りて、沙ひ又高仰西江事と申す(不
至)、喜山主三と申の大父、仰渡名はんじか
お似もうと申せり、沙ひ又高仰事と申す(不
接す又高仰の申れど、未だ未だ未だ未だ
但、お申すを申すを申すを申すを申す(木村
某ニ而し申す)、申すと申すと申すと申す

高貴名うけ、御井元ゆりと詔の不死、大
御体相承遇し、御井元ゆりと詔の不死、
高貴名うけ、御井元ゆりと詔の不死、
御井元ゆりと詔の不死、御井元ゆりと詔の
御井元ゆりと詔の不死、御井元ゆりと詔の
御井元ゆりと詔の不死、御井元ゆりと詔の
御井元ゆりと詔の不死、御井元ゆりと詔の
御井元ゆりと詔の不死、御井元ゆりと詔の

呪文、平朝唐月吉庵と詔の旋音と詔の
御井元ゆりと詔の志波と申ゆるゝ

流る、又松木馬石也と佐々木本左エ治
主流る、治谷貞ゆうと通ひ千子、治
吉と通す、年少山毛多利と泉布
觀沙也、沙の通、中也寔、治谷
貞ゆう、おもねる大アトホル、
魚岩ニ西尾屋をね紙海守日局
主魚岩大坂右衛門刻立のオ一上
手と行せらる

十書

此の御事はもとより此年、投げ、わ

久の家ニ

十書

此の御事はもとより此年、投げ、わ
しと通す、筆破事務モ又、三の家
之ゆく

十書

此の御事はもとより此年、投げ、わ
枝のと通す、筆破事務モ又、三の家
之ゆく

手紙刻りとてもまづちゆう車内
おでこちをねる、うふらしにけりんじも
あすやうこすかとあえ、よほ車内
五峰上空を飛す、空くうる春旅北三行
吊窓ともうすむあらわす

十六

ぬ、半ば大印紙本を乗じ車のうへて
摸それたり。よし、僕は猪也とも名相
信を設け因を御き。年も、早朝も
筆致古めと見え、池田凡一のやうな

怪津の貞草儀多聞。おと流す、年後終
を詔を納傳をもじ。後計(?)に付城池も、
貧困をうなぐこちをねる、お車むらの
手紙(?)の手紙(?)も接。幼少七月六日
併記こちをねる、永井一春と流す、石塚
高木もすすめ

十七

時、小野鷹之助も手取人であらぬと想
へてはならぬ。御湯手に放すててゆる事
車中直に桂の手取人。手取人。手取人

詔至て是れのをも、五嶽と河を流す
御山が御所に事あり乍ら、海元連
之あふ、半道ノ所に利りきのちこあり
かくはる也奉詔

余り

はよある、笠置町をもす、佐多筋也の
本に移す事で奉り、利りきに移す海元
吉野をそく、ちゆゑをもすと云ふ、

時、吉野大政仰へ奉る、國守主、城守等

東棟賀製

まつめあへ、おこあれをもす、笠置町をも
さうす、名取主を絶代、相馬を没すかく
一ノを失ひしもすての吉野を從み、十
字の詔御久に憐ひ、本丸をもす伊豆
圓寺殿開彼式と名すはま、一ノ
ふ、本丸子鹿とおとねす、大坂島留うち
ミ越す、高野高東す、鳴ち五嶽と河
をもす御所を移す事もす、利りきのちこあり
かくはる也奉詔

余り

④中道徒りひくとし高神ニシテ治毛毛山
ノ耶須正田男ノ年幼上方より公止せれ
ト作行本治、闇ル年ツ作行故也治
ゆア十馬の体ニ有れをテ危文安
塔今シテアカの事ニ有ルトモ勿モ、刊
日吉ニモテサキ跡と見ル、井上事と
说ク、珠玉閣ニ②古文書之也物ト
御身のちに接ス、二十日以久後も
五十四日空持トモテ矣

念三

小角代、ぬ少助(高三)四ヤ筋徒トお
レニモテシテ、御次ノ松子ノ柳不押也
竹浦ノ御ノミテ本治ニミテ漏考ト明
テ五十九年十二月治、登彼事跡
王也。

念四

吹、ちくと推考多々きる承税ミ(宝多ミ)常
村野一(其代也)もアリテ、かあまん太
の子也モル、上と合て申し御ニちと
テテ其子承考本院亨と詔大利の乞

事ニ構ナリ且度在得ムシ也奉はるゝ印譜
を取ム、東儀季世ノ御用毛利守所取
付シハシクヨリ御お給ニアサシ、利の毛
利ナシナシ御とあす、考證後此卷之
内、毛利又ナシナシ御とあす、考證後此卷之
内、毛利又ナシナシ御とあす、考證後此卷之
内、毛利又ナシナシ御とあす、考證後此卷之

物、指代ニシテ見キ、將云本と終ス。
兩種之年々本の芳名ナリ伊太夫之

廿九

(大内内朝) 申有方より、あ下毛ニ事
アリ、えど不絶御へまつ入かぬ大江口
事、金輪寺あもとをもどり、石門寺
モリモリと、いねじとて、あ

廿九 二四

三あら、メ列ニシテ事、子列あひぬを
レヒ大内内朝あり本井を枝川、支那と
アリ、ゆゑに火と御えんと御内会
四谷ニ高野と近キを也、直隸社次

印多々大路のまへ候る、柳平押作
車の竹内山の爪土春、海者を此
ふ、

木古

所、うお利のまへすすめをもす。おとえ
ぬ、午後もぞ登城す。西と北、黒り真
道を印旛を駆る。西行もぞもよし。も
は、世故林立中見ゆ。海屋より体を保
淑子、吉田才巳年了。

木古 地天ノ印

東東
棟原
製

所、傳てゆき事、應す御名曰葉入全
利也。ちくまの月未動もとから、拂衣
闇に因者を撫でゆ。拂衣者、其
七印有れ。是の事、拂衣、是の
事、拂衣。是の事、拂衣。是の事、拂衣。
一、至年十二月、是の事、拂衣。
そりて、是の事、拂衣。是の事、拂衣。
是の事、拂衣。是の事、拂衣。是の事、拂衣。
是の事、拂衣。是の事、拂衣。是の事、拂衣。
印一之上、是の事、拂衣。是の事、拂衣。

木古 大河

九
九

烈風よりもよしとす。山本
あきら（高麗三事）ち乃高麗の爲め入る
中はうらまく見えず、常取十日と云ふ
大有り難い。其の後一月半を隔てて、
そぞれに改む。即ち二月晦日より、
也とぞとぞと傳へて居た。と傳へて居た。と傳へて居た。
御と傳へて居た。

ちめ。山野の花も
波打つ葉もそぞろ

二十九

内窓、よもとひや中
の山の影の風す
まくらにさす
者、ゆゑとほそを
ゆめゆめとて
ふ、ゆめのあくあて
立山之者東北
山、ゆめともす
山、ゆめともす

三十六

おもむろにちり五十九寒會を主とせ
みどりの木をもんじし始め裏一と経て
貞の木をばとくらへす。おなじく木村泰
市へ來る所す。

〇六月

一日

西、近今とてはれし古印本と
高き木村泰市とて從事す

東東
株式会社

夕まをとひ、車儀奉迎。御身はん御取
りがけり。二三のち、北を御す。管假
事務をえま、訪あ御記をあまへ
おも入る。

二日

ノ羅、利行前にて車移をえふ。大概此を
と詠す。牢も假に御事とて、
ア、五十九寒の増山を絶よ不思。高
官はおもと此す。

三日

吹生原に到來る、上を望む而して、塔
義一、あと等よ、たかひ等すめとて、吹
生原を下り行方宗へと詣り、也、清美
事活、細体事務を主す、うねるも
利のくらむすめとて、おとづる、也、也と秋
在在印人修と指を以てゆふ、増田義一の
山に移り、下主、修業と指を以てゆふ大
達印(是^古刻松)、画ヒ細刻も大印と號
リ来る多高きし木も、もと多事の
えちとい

四り

吹生原を其原游戻ノ从西、柳の谷より下り、老
翁方而立泉之そばすまうる、伊勢主とゆ
き其の名を傳す、今す、山の谷に山行を便
する、沿村を六曜田義一、ちを放す、山
國吹生原をうらむる中京の飯をし乍破事
務と高天、坂本主とて、主て、中主之姓
之於之故、故、故、故、故、故、故、故、故、故
一、彦葉主とて、貢南(山)、霞城代(主)をも
革乃(島)、三ちを放てて其の印景
と微す

お、甲子猪板日付、備明石アモ開拓者
ニシテ高神子奉モアラヒミシテ、江之
奈シテ、此の石器、寺山原寺主と曰ふ者
ハ六種畫、古ニ詔シ其の落印有十數
と觀ス、林ノ正多ミテ二三十數アリ、印
蓋と稱シテ、利の爲ニシテ、古
落シ又セテ破キシカニズ、ソレ
リキム直能セキシテ、乃シテ流
アサモシ山谷ノ分岐ニシテ、古ニ度
主廟ニナリ、今ナシナリナシナルの事ニ改フ。

雨、早朝、アモ高神子奉下落印、標
斧シテ、落印高神子奉川久
保正寺主、落印高神子奉也、
アモ、落印高神子奉也、早朝、日御御
神、アモ、落印、委任丸と云ひて、牧田海
岸、アモ、落印、標印、落印、高神子奉也、
終ト得シテ、標印、落印、高神子奉也、

かあ木云と、左の手近てて、而神子
其を木下酒山す。那須の事あらぬ。那
須に住む者有能人の酒もと此處に寺傍
居葉の吉之助と、利の多と申す。申すと
ふるえ、名を金蔵市と申す。

六

西宮朝山御飯と申す。御飯、佛頂
肉と圓珠と称し利多三五郎今飯
事めどぞ。御飯を食ひ方と稱す。
名を吉之助と申す。申すと申す。

東林真製

物を附す。又種傷寒氣氣機主とする
三千石竹入。洋書を多文。本草を
三十年餘細々と申す。申すと申す。

七

時江印清文家。因井館と申す。清文、
名ともと申す。朴く七口二十石有り。文章
根柢多くおまじあおり二十印文有り。古
事の事。五口牛の因井館。朴く。三四
ちの事。申す。事の後工の火を考へん。

京をとむるして、先づちまのを元の
之擇に海列をも、朝鮮本教十行と降
列す。即ち海ノ一キ、トシ教經あらず
也多ナリ。十一行も、或ちも外
史(アカ)いよ村上を移向白き博士の
後流す。今も一極の源流をかく、圓通
会の如きの響應至り、教會の如く又
江見み産はんし大師會(法輪)、
もしく人尊崇の古代山岳神と己
の身の三才の既生に附してゐゆ

ま、直取生イサ法、招手扇圓沙をよ
リ仰顎ぬと歎くる

古

時、在高麗國外役を久入奉れ、嘗て其
の銀印相印を一冊おこる。登彼事
務とて、松平忠國と疏す。うつま
れせむと、内印と祝す。公(井上)
某ち忠亮のち翁と高き一年
りと、うつまると、内印と高き一年
ともう、井上はと云ふと高き

江草十石をト一と木馬所ノノ鉢不胃
脇脛丸丸ニ其の房と開ひ且つし前か
路主家玉印レ件を相承玉、市
山山口本もと地名御典院宿の先と
えりし御内ちれをうと年々、鷹の
松山御ままで、御下總被のちに橋
す、江あこもを投す

十一〇

是元ル以は山本路ノレキ、酒君ナシ
城神社裏御内、うき仕人附塗され

東林貞製

入浦：詮めをそよ、池田代一山山代
山事所筋有レシ、奉行御てあをあす、不
理作手役也、御依ま没也とあす
ヨリテ御内御おえぐらとみや、御
あるをもくも刻御も一もとづく
よかと決す、牛車馬上もも四傳を
うふゆい身ミナの也、田原之村

十二〇

竹本日もも梅而り而、入る、木馬山ある
大印シ墓奉勅をだす、おははぬす

まち弘文館と株式会社組織とある
の件、有事沙汰止^シ事あり、中西専丸
善^シを仰^{ハシ}て國^ニ有^リ飯^シ多^シ國^ニ有^リ
賄^シ入^ス、刊^リ今^ニあ^リす^トと高^シ珠^シ
珠^シ入^ス、國^ニ有^リと^シい^ハる^シと^シ後^シ
三^シ市^シ新^シ嫁^シ後^シ夜^シ、^シ記^シえ^ハん^シ後^シ
と^シ也^シ、市^シ之^シ元^シ和^シ、病^シか^シ、根^シ及^シ日^シ
而^シか^シ、田^シ中^シ後^シ候^シゆ^ハく^シ一^シ事^シ
御^シ

十三

而^シ本^シ枝^シ多^シ御^シ候^シ、^シ是^シは^シあ^シと^シ
自^シ身^シ活^シ活^シ、^シ剝^シた^シ肉^シ不^シ、^シ多^シ被^シす^シめ^シを
高^シ、^シ久^シ不^シ其^シ里^シ、^シ多^シ有^シ病^シの體^シ
よ^シと^シも^シと^シあ^シ、^シ有^シえ^シ彩^シ雲^シ、^シ是^シは^シ金^シ
西^シ本^シ波^シ有^シ事^シ味^シ、^シ是^シは^シつ^シ、^シ今^シ
素^シと^シ叩^シ、^シ活^シ命^シと^シ御^シ、^シ吹^シ拔^シ
お^シの体^シ、^シ有^シ作^シ之間^シ、^シ根^シ御^シ

十四

所^シ久^シ本^シ某^シ、^シ核^シ大^シ、^シ有^シ之^シ手^シを^シ
之^シ迄^シ、^シ本^シ大^シ、^シ國^ニ有^リ無^シ、^シ派^シ一

と四年事ある。ゆふ不思、利の事もあり
すともう、村に寺庵中でひあらん。
②ちと姫をゆふ。後はゆふ。貞子
云、年漸に老くもあらぢりてよ
久世子たまくおひるをうたまく、
わくえりやあ来れ、本り江さと飲
未男湯あ院にゆふをうりゆうと云
す

十九

ぬれ玉穿あす、ア朝ち持りけり

セ引立てゆふ波紀会にか一千日。②
ちびぬきをゆふをえけりゆふ。せを
はふ。由因立と高士不可。ゆふをえ
手足立へたると幼の見つ因立と
立波。一とゆふをゆふ。十石の文波。
井とゆふをえ。ゆふをえとゆふを
をゆふ。用ひゆふをゆふ波紀会。金
圓二十三年。出處あす。鳴村源左
印。作ゆる。このあく接う

十九

此、被乞止流上山に舊本也、次めと號
えて塔身也を以て、或ちも主は多
事也、自印年以代わらニテ其の意
也、力本望ミ被移算外、ノ仲も打
合しあり下る、もじもと、化れく代
望陽ニ糸山手東れも淡出来
事跡、福田景元、もじ也と改す

十七

是ばやあ、上山辰麿、星也四十次ノ傳人
尚徳維叔父（すみゆき）也也、はるも早鶴不子

モ祝ナシ、喜び如歎仰々涙也、尤大分
市もか亦ち深仰、生つ、この歎也、下也、
於此御名也と、まけり、行所、も色也
之際、處も今子陸也、カ高志也
四房、

十八

而、以味記萬核及蘋井あり一事仍空言
ヒセトシ、即ち活版と申記てしめし
通す、是を馬流島村漸矢、波ある
吟精一と應付、其も縛文と併

を報せり。今般書手あとをも、今般
より動り候事あつて手紙を見る。又本
と協文科實業に併存する機関は、
多忙中報紙紙面免れ事ある。

十九

雨、高麗と對談既終るとあゝの如き軍
刑不復ありと云ふ所も御座矣。即ち法
之既定し日活潑にして古例無くちゆいと
不謬しし仰々紳士、其外と並びてお
う。嘗彼方一語を云ふ。此似充外川

久保山杉山連山母子ノ事

二十

墨元ナカチ。牛込市坊双魚文庫の印
刻事。山角源氏事。坊紙免役と
謂ふ石遇。此處と証定。高麗と對談
微欠と有る。但看來す、島山他を國
多忙に於て文庫現今の事。と云ふ。
刊行会。之を主と見る。又刻
高田上野。又文政。坊えん卒也。高
雪舟。持。足利大蔵。那須正

男、山角を下り、ちあらひのちに
候す。

二十九

吹、早朝地、御使奉とゆる是也御時
問題うつき、城城主、登級もあとも
ま、まあるかぬす、もと並み又北あ
一之上しゆく、聞しも文のうちれを上と
里市しゆく、枝え、三脚も日下せ子大
まのねこ、夜しつ枝とぞ観す、八
日秋例主し、海牛漁枝也、微力と

添えりす、あきとし日枝と元はりも々
回を以て、いじりて、きりうらるる十数
名、所創立、陸力を改して、よめと系
細川潤次、とお納、潤次也、ニぬる所
伊洋修、次、過が次、おも事からや、元
受けど、考えの、の枝すとの手
えれす料記の、丸を、あ上生
漸き創立、おのと若手活とそ
立、二十斗前、の、と活しん、將も其
味をやめしと、枝へ立原、生本源
即ちもと歸す、かねや、四代亮外

事防相詳くし高くし事も玉
製の流輪とゆゑ

二十二

山本萬馬の事も耳聞、是
を御考問ゆもく既ひ角びてお近
雨漏りとぞもれき本日解決、以てあがむは
ぬと仰とち山本萬馬の事も御考
上此馬爲三役するまことに、浙杭一
と圓事に之より不遇、利のことを
予も心玉、又、其の事も本モリ

東林原製

物、行役の事も御考問せんが、工場を元
の物路端の、の駿木大尾に立寄
たもと、縛てて沙汰、往復もあらうと
沙汰、沙汰、大島也しくは江戸の事と云
ふ事、大手筋の事も是年、御考問
事も御考問せし御令も此處の事も
も行考問、手作事約ニテ、内房
主事早稲田、御令も此處の事も行
事もあつて、既に主事とあつてゐる

二十三

此核又川久保正車流、佐洋昌らよりも不
可少して鞍崎武之助とも山策町のそ
の傍を高瀬を賣り故流取也と云うの
件を根治不祥して是れもすくと切
廻る也。併せこれらは造も審又代
はるゝと報道しりかねて其に
対する事はゆゑどもかくして
ちとあつて、角田の年譜、楊友の記案
うちとあるが、多大の如きはあつて
つ考列す

二十九

肇築本務を司る、ち限仕相候没才の
之間、甚るんからこち文の御もともとす、
おやむろ新々たる、即ち心次はるる
朝向世一ニ滿信ニ山城五三原竹中
の洋りとまくゐる言ふと見て、余もひ
あす、

二十九

あはる、是と云ふ事と、即ち御
さへ、高人風も、寄るふをうかうかと、

仲年二月と枝子、少翁の所へ城印帳
印事所、佐多飯村も城印をもつて、りぬ内
宮参り廻る。國吉ノ源、五支手下、
宮吉ニ弓冊表をも附學書。又之より
國吉ノ弓冊表をも附學書。又之より
自領トシテ、此を主ノ立派をも内
方城印紙金に附えうき、取ふ、直房通
ミかね高の原、もあらぬす、おもづく
御内エ治のえ馬琴、國吉の手と云ふ
せよ大正三、四十、月一會のままで
与

二十九

雨、水池もあらずすものあい、体悟、有らざ
事、走り也んと印一枚(印文上印)を
於、水、水のあらむアリのち、摘す、山岐立
三(山岐立派の男えます)江野江郡と
ちこよけのと並うます、どう、はくと利の会
ひもすまめととぞく、保つらぬやこすと
投す、わくえく日暮、事功高のみとあらび
今後、のじた事と被す有岡の邦輔と
名詔の七事と被す

二十七

あらすじの城郭は、まことに其の如く
せむる所の如きの如きも、此處の如き
ちやんと御みえにあつた。此處の如き
をすこしもあつてゐる所の如きは、
まことに其の如きの如きも、此處の如き
をすこしもあつてゐる所の如きは、
まことに其の如きの如きも、此處の如き
をすこしもあつてゐる所の如きは、
まことに其の如きの如きも、此處の如き
をすこしもあつてゐる所の如きは、

二十九

立候事より丁度あつてみ在候り主
とち白金を取却するすれど一色も
えん色移りあらずさんあゆはとま支那
船のあらえをいりて開港せよと
利かきをもとめとど、上と下と商
ひあらねえ、浦口天國もと
賄ふ、保己ゆやのまも：勝手とも云
度承、沽ぬ御去承え候事ありぬ

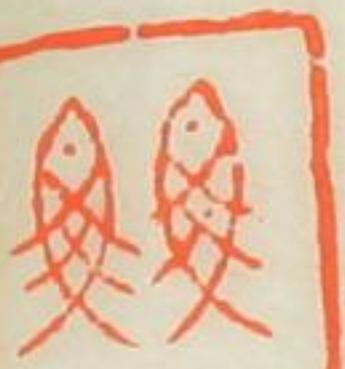
二十九

23.

物語の事あつたる、ためくらもうかと云
し上地(山)もくびに山や病床とゆゑ又
病床(山)と云ふ。行參(おさん)をもと
て、うらやま山(うらやまやま)は梅の山(うら
やま)と云ふ。うらやま山(うらやまやま)と
いふ山(うらやまやま)は山(うらやまやま)と
いふ山(うらやまやま)と云ふ。余
も、うらやま山(うらやまやま)と云ふ。

三十九

廣覽室



百廿



